

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

3.6 座談会「ワークショップ10年をふりかえって」 2015年8月7日 於：国立民族学博物館

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-01-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上羽, 陽子, 中牧, 弘允, 中山, 京子, 藤原, 孝章, 森茂, 岳雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008326

3.6 座談会「ワークショップ10年をふりかえって」 2015年8月7日 於：国立民族学博物館

話者：上羽陽子・中牧弘允・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄

1 参加者の満足度

中牧 では藤原先生に口火をきってもらいましょう。

藤原 ドラッカーのマネジメントっていうのは顧客の満足度だけれども、参加者および教員の満足度についてご意見等いただきたいのですが、いかがですか。

中牧 アンケートが一番重要な資料で、それは藤原先生が分析しているように、みなさん当日はすごい満足されているんですね。満足の要因は何だと思われますか。

藤原 そうですね。参加者は、当日は満足されていますよね。それからやる方の教員もそれなりに当然満足していますよね。

森茂 満足の最大の要因はもちろんプログラムの内容と思いますが、民博という異空間の中でそれが行われるという魅力があると思います。民博の最大の魅力は、モノとしての展示物です。日常の学校の中には存在しない様々なモノ（展示）の中で、それと関わって何かを作り出す、その面白さだと思います。もう一つは、人との関わりです。このワークショップは、ファシリテーターとしての大学や学校の教員の他に、民博の専門の研究者の協力があるということです。研究者から展示についての解説や展示の意図をお聞きすることによって理解が深まり、教室への適応可能性を考えることができます。それからもう一つの魅力は、研修に使われている手法の多様さです。モノを作る、体で演ずる、踊る、演奏する、それをもとに話し合う等々、最近強調されているアクティブラーニングの手法が取られていることです。

中山 感覚というものもあります。私もワークショップごとに、分科会で、アンケートをとっているのですが、やっぱり皆さんすごく満足はしていただきます。書くときのリップサービスもあると思いますけど、でもなんか、表情を見ていて、こう明らかに不満な方はいないですね。やっぱり参加しているということは、主体的に選択をしてきているというので、満足度はかなり高いんじゃないかと思います。なぜかという、リピーターがいるからです。

藤原 リピーターも結構多いですね。

上羽 そうですね、アンケートではもう何回もきているとか、前回とは違うワークショップに参加、今回はこのワークショップに参加したけど前はこれでという風に連

続して来られている方がいらっっしゃいますね。

藤原 それと、アンケートを見ているとMMPの方が結構リピーターで入っておられる。そういう意味ではMMPの方の勉強にもなっている。

中山 満足度が高い一方で、新規開拓の教員の参加が多かったかというところとちょっと疑問が残るところがありましたね。

中牧 それはスタッフじゃなくて参加者の教員のほうですか。

中山 参加者。一般の方で、何度も満足度が高いから、毎回来る人は多いのですが、新規開拓にいらっっしゃることが、裾野が広がっているかというところ、長いおつきあいをしたいタイプの人たちが多い感じがしますね。

上羽 私は割と後半の方からワークショップにかかわらせてもらったのですが、10年間の流れみたいなものをたとえば満足度で見た場合に、なにか傾向とかそういうのがあったのでしょうか。はじめの頃にされていたものと中盤と、10年を初めの中盤後半と分けるとしたときに何か特徴みたいなものはありましたでしょうか。

中山 最初は民博という場で教員研修とかワークショップっていうところの新鮮さ。その新鮮な感覚が満足度に変わってくるのが、最初の方だったと思います。で今度は中頃になってくると、中身がおもしろい。バラエティーに富んでいて毎回ちょっとずつ変わっていくので中身が飽きないっていう満足感。最後の方はくり返しになって今度は、スキルとかそういうことを学びたい、ファシリテーターのスキルだったりもの見方とか。そういうことを学びたいタイプの方の満足度は高かった。だから満足度は質が変わってきたっていうのはあるかもしれない。

上羽 10年間の中で、教員・民博研究者と一緒に参加者も何回もリピーターの方で、初めて経験した喜びから徐々に質が変わってきて、与えるものと求めるものの質が徐々に変わりつつあるのかなっていうのも結果の一つとしてはあるのではないのでしょうか。

藤原 ただアンケートを見ると、一応この5年間をとっただけですけど、やっぱり初めての参加者がやっぱり圧倒的に多いですよ。各回ともに。

上羽 全体のなかでいくと。

藤原 はい、だからリピーターは一定のコアな層はいるのですけれど。初めて参加っていうのも結構多いですよ。で、さっき言われたように、最近の5年間は活動内容は初めての参加者の人も楽しめるアクティビティー、中身になってきている。結構バラエティーに富んできているのがこれまでに言えていることですよ。

上羽 あと、今から過去10年間を振り返っても、たとえばほかの博物館とか美術館の参加型のワークショップっていうのはやっぱり10年前と今は全然違って、参加された教員のなかでも、いろいろなほかのワークショップに参加している方っていうのが多いと思いますけども、10年前だと本当に参加型のワークショップっ

て初めて経験した、はじめて民博に来たとかはじめてそういう参加型のワークショップに来られたっていう方の新鮮さみたいなのは、最初の頃はあったのかもしれないですね。

中山 参加型のワークショップが多いのですが、ワークショップの中には結構レクチャー的な、いわゆる典型的な教員研修、それに近いスタイルのものもあれば、もう本当に机もなしから始まるようなワークショップもあった。だから教員の求める、私は基調講演でも話をしたのですが、いわゆるそういうベーシックな教員研修になっている人が求める研修もあるし、いわゆる教育委員会の教育研修とは違うスタイルのワークショップもあるので、満足度がその人によって選べる場所にまず良さがあったのかなと思うのです。最初私は、民博に来てまで教員研修的なやり方は全然いらんんじゃないかと思って強く反対したのですが、でも、そういうものを求める人にとってみればそういう方が心地よい訳ですよ。体を動かしたり、演じることが苦手な人にとってみれば、たとえばそういうワークショップがすべて強要されると満足度が低くなるわけですよ、不満の方が大きくなって。だからそのバラエティーがあったことが満足度を支える要因だったんじゃないかな、と10年間を振り返ると思いますよね。

上羽 今、満足度の話で不満、っていう話も出ましたけども、私も最後の方にかかわらせていただくと、やっぱり2時間のなかで内容が結構盛りだくさんだったっていうのを書かれている方も結構多く、もう少し議論をする場が欲しかったとか、もう少し振り返る必要もあったのではと。過去のワークショップにおいて振り返りの場所っていうのも欲しいって、やっぱりそこもあったと思うのですよね。それは時間と内容とのボリュームみたいなものとすると、客観的に見ると、少し時間に対してはワークショップの内容が私自身もいつも詰め込みすぎて、伝えたい、分かっていたきたいということで、詰め込み過ぎる傾向があるのですけれども、その部分でもう1時間くらい各ワークショップで振り返りがあると、さらに満足度が上がるようなものになるのかな、と思いますよね。

藤原 民博の研究者の視点から、それなりのコメントをいただけるっていう時間がなかったですよ。

上羽 そうですよ、いわゆる文化人類学・民族学の研究者の視点から、逆に客観的にこのワークショップについての意見であるとか、視点であるとか、そこについて学校教員と参加者と民博研究者とで語れる場って言うのが意外に時間としては少なかったかな、とは思いますがね。

藤原 今回の報告書でもコメントをもらっていますが、やっぱりそこにそれなりの厳しい意見もありましたから、そういうのは実際、共有できるのが一番いいですよ。

- 中牧 教育委員会なんかが主催するワークショップっていうのは、かならず最後に評価みたいなものがでてくるのですか。
- 中山 講評という形で。
- 中牧 講評ね。それがこのワークショップの場合には非常にルーズだったというか、無かったというか。むしろそこまで求めなかったというか。
- 藤原 教育委員会のスタイルは結局、偉い人が上から目線で言う講評なので。我々はどちらかというところというのは求めてないのですよ。
- 中牧 最初是多田先生が講評という形でしてくださったけれども。
- 藤原 博-学-学（「博物館-学校-学会」の略）とやっているの。
- 上羽 最初というのは、しばらくの何年間かは講評という形をとっていたのですか。
- 中牧 そうです。
- 上羽 それは全体の各ワークショップについてとか、全体を見回って？
- 中牧 内容的にはもうすでに大体枠組みはできていて、見回っていてそれをあてはめてみる。そういう技術を持っている。枠組みがなくて、人類学なんかは実際に見てそれで抽出していこうとすると、けっこう難しい。
- 藤原 ただ上羽先生も言われたように博-学-学の三つがバランス良い手順というか中身になっているかというところ、ちょっと時間が、そういう意味では活動中心になっているという可能性はありますよね。
- 藤原 一つだけ付け加えておきたいのは、参加者であった教員が今度はやる側になっているという、10年間かけて。
- 中牧 ファシリテーターみたいなね。
- 藤原 そう、教員のいわゆる成長みたいな部分が、一人の個人にとってはものすごくあったっていうのは大きいと思いますよね。
- 中牧 秋山明之さんもそうですし、ほかに誰でしたっけね。
- 藤原 あと織田雪江さんもそうだし。それはやっぱり特筆すべきことだと。
- 上羽 参加者がその逆のそういう立場になるというのは、各ワークショップの柔軟さ、全体のワークショップの柔軟さとか、受け皿の深さみたいなものがあるっていうことですよ。

2 教員の強みと研究者の強み

- 中牧 次の話題は教員の強みと研究者の強みですね。
- 上羽 やる側の教員ですよ、やる側っていうか学校教員ですよ。
- 中山 ワークショップを運営した側の、学校教育側の教員ですよ。
- 上羽 学校教育側の強み。

- 藤原 この三つは一緒に話しても。
- 中山 そうですね。教員はなんと言っても学校教育のカリキュラムとか内容が頭に入っているのです、嗅覚として、求めている先生の……そのマッチさせてあげられるというか、民博の資源と既存の学校カリキュラムを繋いであげるっていうことは教員にしかできない。だからそれは強いですね。あとは教える手法とか、教えるというよりもワークショップでどうやったら先生方が自発的に学びたくなくなってしまふかっていうその辺のしかけていうのは教員の強さっていうのは絶対にありますよね。
- 藤原 逆に、この民博でやることの意味は、その教員の強みをよりサポートしてくれる資源があるのですよね。民博にはもう宝物みたいなものがたくさんあるので、それを生かせるっていうのはすごく教員としてはありがたいことなのですよ。
- 上羽 民博の研究者との関連でいくと、実際の現場の教育プログラムに携わっていてカリキュラムを知っているというところを、参加される教員の方の目線っていうものを汲み取れるっていうのは一つ大きな強みだと思います。それはやはり民博の研究者はそこは汲み取ることができないと思うのです。それはなかなか難しいので、博-学-学の大きな強みですよ。
- 藤原 それとやっぱり、研究とフィールドの広さと深みってのが研究者にはありますよね。教員にとっても、研究者がそばにいてくれるとすごくありがたい。間違ったこととか正しいこと、ではなくてアドバイスしていただくっていうのはすごく大きなメリットですよ。それは、ここでしかできないことなのですよ、逆に言う。
- 上羽 民博研究者の強みの方にもいいのですかね。民博は約60人の研究者がいる。なおかつ12,000点の本館展示資料、常に見ることができるものが12,000点あって、映像も600点ぐらいある。それはすごく民博の強み、民博の研究者というより民博はやはりそこが一つ大きな強みですよ。
- 中牧 眠っている資料もたくさんある。
- 上羽 眠っている資料も。後ろには340,000点あるので。
- 中牧 そういうものも活用できるといいですね。
- 上羽 そうですよ。で、展示が研究者の成果、研究の成果という形になっているので、展示から研究につながりやすい、まさに博物館機能を持つ研究所ということでは、それはすごく大きな強みだと思うのです。
- 中牧 研究者の弱みは、児童・生徒に対して語りかける言葉を知らない。方法も身につけていない。
- 上羽 そこはやはり弱みですよ。カリキュラムのことであるとか、いかにして易しく伝えるとか、短い時間の中でいかに易しい言葉で本質を伝えるみたいところは

やはりある程度訓練が必要だと思うので、その部分というのは、弱みかもしれないですね。

中山 弱みでいえば、教員の弱みとか弱点とか、だめなところは自分の教材研究をそのまま全部教えなくなっちゃう、押しつけたなくなっちゃう。

上羽 それは具体的に言うとしたら、たとえば？

中山 自分のワークショップのテーマにすることで勉強しますよね、民博の先生がサポートしながら自分がやるからには勉強しますよね。それを全部伝えなくなっちゃう。だからワークショップはてんこ盛りになるってことはありますよね。先生の教えたがり病みたいなの。だから民博でせっかくワークショップをやるのだからもっと教師というよりもファシリテーターの色を強くするというか。ここの資源をゆっくりと味わってもらふことをする前に、せっかく来たのだからたくさん勉強して行ってねっていう気持ちでいっぱいいっぱい、提供したくなったり。

中牧 そういう知的なものではなくて、むしろ体験とか感動とかね、狙っているのはそのあたりかな。民博でできるのは、そういうのが大きいと思います。

上羽 先生方だとたぶん本当に学ばれたこと、今回のワークショップをするにあたり学ばれたことを、学ばれたままで100%をお話ししたくなるっていう気持ちもよく分かるのですが、研究者だと本当に大きい氷山みたいなものがある、ほんのわずか見えているところだけが展示になっていたり、下にはすごく大きな氷山があるのだけれども、上にみえている一部分だけで語っているので、そこをうまく、民博研究者と教員とのマッチングみたいな。そこら辺がうまくできると、お互いの強みが一致する。でもたぶん、なかなかそこがうまくいかない一体どういう本を読んだり、何を見て勉強したら良いかっていうのが分からなかったりとか、ちょっと違う方向に行ってしまうと、やっぱりいつまでも平行に走って行くところで、そこら辺で歩み寄りとかコミュニケーションがすごく大事なのだなと今回感じましたね。

藤原 ここ数年は事前の研修会っていうのが少なかったのですよね。当日だけみたいな。本当はもう少し事前の打ち合わせ、研究者との打ち合わせとかがあって、実はこうだよみたいなことが、ある程度共有できればファシリテーターの方も余裕を持ってできたと思いますよね。

上羽 昨年の時は割と事前にもお互いに打合せを開いて、それぞれ一緒に展示場を回ったりとか。割とそれを見て共有する時間、もしくは同じ星を見る時間というのか。これについてやるんですよっていう同じ方向を向く時間みたいなものが長ければ長いほど、分かち合えるものが多いのかな、と思いますね。

藤原 あと学会の強み。学会として関わることでいわゆる特集とかね毎年やっているの、そういう意味では学会の一つのブランドになっている。このことは非常にあ

りがたいことで、強みかなあとと思いますけどね。

中牧 教育委員会ではないというのが、学会の強みかな。学会に集まっている教育学の専門家にしろ、現場の先生たちにしろ、自発的・内発的に関わっているのですよ。教育委員会だと義務とかになるのだけれども、そうじゃないってところがやっぱり大きい。

上羽 たしかにおっしゃるように、学会でつながっているというのは。あともうちょっと欲を言うと学会での一番ホットな話題ってというか、今熱い、たとえば民博教員だと、学会の動きとかもやっぱり分かっていない者もたくさんおられるので、一番、今の流れの中で例えば10年間の中で学会ではどういう議論があったりとか、どういうトピックが今一番熱いのか、問題になっているのかということも全体で共有できると、さらに博-学-学って意味ではより深まるような形になるのかな、と。

中牧 そういう意味では藤原先生のやった、ESD カリキュラム。あれは10年前だとやっぱりホットな話題だったわけでしょ。

上羽 そういう今一番ここに問題点があるとか、こういう議論が学会でされているっていうものが伝わりやすくなる。

中牧 あるいは中山先生のポストコロナルもやっぱりホットな 이슈 だったというような印象は受けていますが、実際はどうだったのか。

中山 そうだと思いますよ。でもここに来る人たちってやっぱり学会の中でも、前線で走っている人たちとかが多いので、自然に学会での研究成果とか国際理解教育の新しいものはここに確実に反映されていたのじゃないかっていうのはあります。あと、この民博のワークショップに来られなくても、学会誌やニューズレターでかなり毎年しつこいほど報告をあげていたので学会の皆さんもみんな知っているという状況があるので、国際理解教育に興味があるネットワークへの周知。来てはいないけれども、そういうことが民博で行われているということの、なんかいつもちっちゃく噴火し続けている。毎年一回。そういう状況は関係者に伝わっていたのじゃないかと思いますね。それは組織の良さだと思いますね。

藤原 それにこういう出版物も出してますもんね。

森茂 民博では、2003年に共同研究「国立民族学博物館を活用した異文化理解教育のプログラム開発」が開始され、様々な角度から教育メディアとしての民博の可能性を探り、博学連携のあり方を考える研究が始まりました。その研究成果を『国立民族学博物館を活用した異文化理解教育のプログラム開発』（国立民族学博物館調査報告書56）として出しました。また、それ以降の学会員の実践や、2005年から始められた教員研修ワークショップの成果を『学校と博物館でつくる国際理解教育—新しい学びをデザインする—』（明石書店、2009年）として出しました。

今回の本報告書は、学会と民博の研究成果の第3弾ということになります。

中牧 いざと言うときはそれにアクセスすれば、なんか活路が開けるみたいな、のはあったかもしれませんね。

3 オーセンティシティをめぐって

藤原 最後に一番議論してきた本物さについてですが、教育は教員が解釈して教材を作っていくのですけれども、その解釈の仕方がちょっと本物性からずれる場合が、往々にしてありますよね。それは不可抗力で、こういう風にしたら教えやすいという教育の本質的な方法論と、内容的に見るとそれはおかしいんじゃないかという、いつも授業づくりと内容研究とは矛盾の関係にあるんですよ。

中山 私は曲がりなりにもいっぱい文化人類学を勉強させてもらって、学者としての顔を持つ。でも学校の先生の教員のそういう顔も持つ。両方を自分の中に持ち合わせると思うのですね。やっぱりここは苦しみますね。何が本当かって、異文化理解とかそういうフィールドに行ったときにも、結局自分の目を通したものの見方をして切り取ったものを教材に言うことは、そもそもそこから始まっているわけですよ。民博の研究者の先生だってなにかを持って帰ってきたり、何かを展示する段階で切り取っているわけで、そこから発生しているものを今度また教員が教育のフィルターを通してそれをまた切り取っていくわけだから、やっぱりその社会にあったものとはずいぶん……パズルのようなピース状態になったものを使っているわけだから、難しさは絶対あると思うのです。でもその専門性によってそれは、ええ！と思うことがあっても、教師はそれに気づかなかつたりするし、専門家がこれは大丈夫だと思っても、教師は、それは教材としてはちょっと魅力があまり無いと。その辺の問題はずっと含んでいることで、たぶんワークショップのパフォーマンス・演劇とかドラマの方になってくるとそれは一番出てきやすかったんじゃないかなあと、思いますよね。

上羽 教材に向いているっていう方向、教材的なキャラクターがすごく魅力的な方に走ってしまうと、やっぱり元々何を伝えたかったのかっていうことが、たとえばなにか一つの文様であったとしても、その文様が面白ければ面白いほど文様の面白さだけが一人走りしていってしまう。そこで生み出された社会背景とか作り手みたいなものに慮る力がちょっと遠くなってしまいうことがすごくあるのかな、と思いますね。その魔力というか、異文化を理解するときの、一つの穴みたいな魔力みたいなそういうのがあるので、やはりそこも研究者と教員ともっと密にお互いもう少し顔と顔を合わせて議論し合う。そこを伝えないとなかなかそれはメールとか電話とかではやっぱりうまく伝わらないものがあるので、それも今後の課

題になってくると思うのですよね。

藤原 さっきね、氷山の例で言われましたけれども、例えば民博に来る一般の参加者とか学生にしても生徒・児童にしても、来てものを見るじゃないですか、展示を。でも勝手に解釈するのはよ、自分の思いで。展示をされた研究者の思いと別に解釈が観客の中に入っちゃっていますよね。そのギャップって必ずありますよね。このワークショップの良さは観客の自分本位の解釈と研究者の本物的な解釈の間をつなぐところであって然るべきかな、という風にほくは思うのですけども、そこが一番のミソかな、と。教材を作るときか授業を作るときとか。

森茂 このワークショップは、教員と民博研究者の〈応答〉によって作られているというのが特徴ですが、その〈応答〉の困難を感じる時もあります。大きさに言うと教員のもっている「教育の知」と民博研究者の持っている「学問の知」の衝突とも言っていると思います。

例えば、2010年に「裏側見せませす—『じゅうたんをつくろう！』を通して」というワークショップをしました。これは、西アジアの手工芸文化を代表する絨毯を取り上げて、手織りの全行程を体験しながら地域の風土と織物の関係性を考えるワークショップです。これに参加した教師が、教室の実践では地域の風土と織物の関係という視点ではなく、それまでの授業の流れで絨毯をそれに携わる児童労働との関係で授業をしました。これは、ワークショップを行った研究者の学問的意図と教師の実践上の意図が異なった例です。

また、2013年には、「ものづくりとiPadを用いた現地学習」というワークショップが行われました。これは、まず事前学習としてシンメトリカルなアイヌ文様の切り絵を行い、小さな額縁の飾り物を作製し、その後アイヌ展示場でiPadを用いたマルチメディアの解説作りを行うというものでした。しかしこれに参加した教師の授業実践では、アイヌ文様とは異なるシンメトリカルな文様の切り絵をしました。これは、実際のアイヌ文様にはない文様を授業で作ってしまったという事例です。

同じ2013年には、私もファシテーターになった「民博シアター—展示の登場人物になってみよう—」というワークショップを行いました。これは、展示を題材にドラマ・演劇の手法を使ったアクティビティです。西アジアのパレスチナの結婚式の展示を題材に、そこに展示されている花嫁や花嫁の父親になって結婚式の後のストーリーをセリフや動きで表現してみるというものでした。参加者は、想像を巡らし熱演しましたが、研究者からはイスラム世界に身を置いた事のない参加者が日本人の価値観でイスラムの世界の暮らしを因らうとすることには限界があり、空疎性があるとの指摘を受けました。

この学問的事実や思考と教室で教師や学習者が行う活動や思考のズレや衝突をど

のように埋めるか、研究者、教師の双方が相互理解をすることが大切と思います。

上羽 今回のワークショップですけれども、異文化理解っていう言葉がよく出てくると思うのですけれども、異文化を理解するってたぶん、中牧先生もご経験あると思うのですけれども、フィールドに入れば入るほど理解できなくなるときがよくある訳ですよ。何十年かけてその社会にいても。なので、このワークショップでも異文化を理解させるところまでっていうのはなかなかやっぱり到達しないかもしれない。けれども、異文化を理解することは難しいのだ、異文化っていうのは簡単に理解できないのだからことに気づいていただくだけでもワークショップ来ていただいた甲斐もあるし、やりがいがあると思うのですよね。要は勝手に自分で思い込んで、これはこうなのだって言う風に思い込んでしまうことがあまり良くないっていうことを経験していただくっていうのも一つの価値だと思うのですよね。ついつい私たちは自分のものの考え方でこれはこうだろうとか、あれはこうだろうとか勝手なイメージだけで進んでしまう。

中牧 学校現場ではそれはたぶん通用しないのでは。

上羽 ええ！？学校現場では通用しない。

中牧 つまり、回答はちゃんと一つ正解がなければ、ドリルにしても、答案にしても困るわけですよ。

上羽 異文化を理解させなければいけないってことですね。

中牧 選択肢があって、正しい答えがある。教育ってそういう体系なので、ここが大きな違いなのです。研究と教育の。

藤原 ただ我々は正しい答えを選ばせるためにやっているわけじゃないのですよ。観客は自分の物差しで展示を見ますよね、学生なんかとんでもない発想で見るとは思いますが、聴くと、実際に展示される研究者の方の思いとは全然違いますよね。そういうずれてこういう博物館には必ずあるんじゃないかな、と。それもこれからの博物館の展示としては、ある程度想定した上で展示されるべきかな、と。

中牧 学生だったら良いですけれども、教員の場合だと、教育の現場で子どもたちに教えなければならない。そのときに自分が迷ったり、非常に多様な価値観みたいなものが入り交じって頭の中がぐじゃぐじゃになっていると、かえって教えられないことがあるわけですよ。それで単純化して提示するといったような、教育としてはジレンマがあるんじゃないんですか。

中山 ありますよね。

上羽 限られた時間で、これだけやりなさいっていうカリキュラムがちゃんとあって、学校にいる子どもの時間も限られているので、そのジレンマっているのはきつとすごくあるとおもうのですけれども。やっぱり民博っていう場所とか研究者っていうところと関わる時には、中牧先生のおっしゃるような一つの回答がいるの

かもしれないのだけれども、参加された先生方、教員の先生方には異文化っていうものの理解をどういう風に理解できるのか、あるいは理解できないのかっていうことを考えていただく時間っていうのがやっぱり必要なんじゃないかって思うのです。考えずに教材としてこれを持ち帰る、この文脈だけを教材として魅力的だから持ち帰るっていう風では無くて、本当はもっとこういうことが伝えたいのだけれども、仕方がないからここだけ持って帰るっていう持ち帰りの場合は、同じものだとしても、そのジレンマの中で持ち帰られた方と、やった民博楽しい、これならできるわ、と持って帰るものでは違うので、そこの違いってものはたぶんアンケートとかそういうものでは浮かび上がってこないかもしれないのですけれども、やはり民博側としては一番重要な部分かな、と感じますね。

中山 参加者のレディネスだと思うのですよ。本当に大学出たてで新人研修に近い人は、民博の場で、へえこんな世界があったのだ、とか異文化にふれるなんてことは学校教育の中では忘れちゃうけれども面白いな、という感覚をそういうものを忘れちゃいけないって思って帰る人もいれば、かなり自分の力で海外に出たりしてものを見ている先生たちは、ここにきてもっと専門的なものだったり、民博の先生からもの見方を学んだり。たぶん参加者の状況とかバックグラウンドによってその持ち帰りたいものとか、同じワークショップを受けても吸収する視点とか深さが違うのだからっていうのは感じますよね。

藤原 さっきの異文化理解のこと言われましたけれども、そこは民博研究者が一つの展示の背後にどんな思いがあってどんなことがあるかを、こういうワークショップだからこそ説明できて共有できたら、教材の解明もそこまである程度まで見えてくる可能性がある。それができる可能性の場所なのですよ、実は。だから教員にとっても本当は非常にありがたい場所なのですよ。

中牧 教員の頭をぐじゃぐじゃにする、そういう機能はある。でも、ぐじゃぐじゃのままではね、教室に帰れない。矛盾が孕むよね。

上羽 でもわたしはやっぱりぐじゃぐじゃになっていただきたい。教員には一回ぐじゃぐじゃになっていただいて、ああこのワークショップでぐじゃぐじゃになったからよく分からない、と思ってでも一回ぐじゃぐじゃにしてみたいっていうのはあるのですよね。ですので前に佐藤優香さんと一緒にやった、見方を開発、っていうのはインドの染織資料で見方を開発しましょうっていうワークショップ。やっぱりみなさん展示品一つを見ても、どうやって見たら良いのか分からない。キャプションがあったり何かあったりしてもどうやって見たら良いのか分からないっていうものを、佐藤さんと一緒に開発という形でやったのですけれども、やっぱりどうやって見たら良いのか分からない。なおかつ今のまさに中牧先生のお話と一緒に、正しい見方があると最初から思っていて、こうやって見なければいけな

いっていうのがあるのだけれども、そうじゃないよっていう話をワークショップの中でしたので、なかなか見るとか見方とか理解するとかすごく難しい。もちろん研究者もそれはあると思うのですけれども、なんかそこをちょっと私としてはぐちゃぐちゃになっていただく機会なのかな。他にぐちゃぐちゃになる機会ってあるのですかね？教員が。実際にご自身で学校教員がぐちゃぐちゃになる時間が。藤原 教員は授業作りをするときに、たとえば社会科だとすると、いろんな文献を読みますよね、いろいろな立場の意見があるじゃないですか。ぐちゃぐちゃになるのですよ。だけど明日授業しないといけないので、とりあえずここまでは押さえよう、みたいなね。そういうのはあるのですよ。明日授業をするというのが教員の場合必ずあるので、すごく難しいと思うのですよね。でやっぱり子どもと対面しなくてはいけないのです。

上羽 それが先程おっしゃった、まさに何かを必ず出さなきゃいけない。

藤原 一つの答えを与えるわけではないのですけれども、明日授業をしなくてはいけないから。意外につらいことなのですよ。頭がぐちゃぐちゃになりながらどっかの視点だけは。

中牧 研究者は、一生かけて考えます、でいいのです。教員はそうはいかない。明日の授業がある。

藤原 自分がぐちゃぐちゃというのが子どもに伝わったらもう授業できないじゃないですか。ある意味、教育の授業の場面ですと。それなりの自信をもって言える何かがないとだめですよ。

4 今後の課題

中牧 このワークショップってというのは要するに「顧客の創造」というドラッカーの言葉を借りると、民博の中の資源に関心を持って、それを教育の現場で使いたいと思っている、そういう教員を創造するというのが一つの目標であったわけですが、ではその教員が、どう現場でわかりやすく、間違わない範囲で、ぐちゃぐちゃでない、ある程度すっきりした形で教えられるかっていうことを、民博はアフターケアとしてもっとサポートしなければいけない。そういう窓口が民博側に必要だということなのですよ。やりっ放しでワークショップが終わるのではなくて、その後のフォローアップ体制みたいなものがやっぱり必要です。これだけのスタッフがいるので、私なんかは今いる市立博物館だととてもできない対応が民博だったらできる。そういうところに民博の強みがあって、今後の課題が横たわっていると思います。

藤原 学会として言えば、やっぱりファシリテーションができる教員を増やすというこ

とと、そういうぐちゃぐちゃという状態で、でも明日授業しないといけないという場合のノウハウと言いますか、そういうのは学会としてはそういう状況を共有しながらファシリテーションできる人を増やしていくことは必要かなというふう風に思いますけどね。だからああいうワークショップをやっていただく、やっていくことはすごく大事で、それが一つのトレーニングの場にもなると思います。

上羽 過去10年間でやってきたワークショップの中でも学校教育のプログラムに落とし込みやすいようなプログラム。逆に今後発展性が、芽があるというか発展性がある、それが民博の研究成果と学校の教育プログラムとで上手くいきそうなものでも、やっぱり。

藤原 探っていくべきですよ。

上羽 探っていくべきものはいっぱいあるわけですよ。

中山 ワークショップの性格で、結構明日、とか一学期とかの近いスパンで役に立ちそうなそういう本当に直結したようなものもあれば、もっとうのを見方を養うような、教材になるわけじゃないけれども、その先生・参加者自体の体験が、その授業作りだとかに還元されていくもの。性格がちょっと違うと思うのですよね。だからいくつかのワークショップはすぐ、役立つ、役立ちやすいもの。そうじゃないものもあるので、一概には全部は繋げるわけでは無いと思うのだけれども、私がやってみてやっぱり確実に芽が出て子どもたちに実践をしている先生が見えてくるワークショップと、すっごい勉強した、面白かったで終わるものもあって。でもそれは終わってしまうように見えるのだけれども、その先生が勉強したこと、学んだことがどの段階で生きているかっていうのはこっちは分からないというですね。2年後3年後にその先生が何か教材を作るときにものの見方、その時のああそれだ、と繋がるかもしれないから、やっぱり教育の営みは長いので成果を求めすぎてもつまらなくなるかな、と。

それはなぜかという、民博のやるワークショップだから。日常的な教員研修はおそらく成果は見えやすいし、繋がるのが求められるけれども、民博っていうのはもっと違う性格があるかなって思うので、その辺は差し引いて考える。言い方は悪いですけども。大きく考えていった方が魅力的なんじゃないかなという気がしていますね。でも私はみなさん先生方に結構厳しいことを会議で言ったことがあるのは、自分で自分のワークショップに来てもらう努力をワークショップする人がしていますか、と。自分のネットワークの中にはそういうことに興味を持ちそうなアンテナがあるはずなのに、そういうことをしないで、ワークショップをやることだけに満足をしていて、自分でフィードバックを求める努力をしてない。だからもっとワークショップをする側の人自身が、この民博の場だけを借りるだけじゃなくて人をだけを借りるんじゃなくて、自分で努力をして集めてき

でもらってフィードバックを自分で吸収する努力。それから、自分のやったことに対して、来た方としっかりコネクションを作って、実践に生きているのか、生きていないのか、追跡をしていくようなスタンスを自分が持たなければ、本当にその日だけのワークショップをする方もそれで終わってしまう。満足感だけで終わってしまうので、そこはする側が考えなければならないと思います。だからファシリテーションだけで満足してはいけない。やっぱり、教師であるから自分の伝えたことがどういう風に裾野が広がっているのかを見るって、そこはやっぱりちょっと足りないんじゃないかなあと。今後の課題というか努力しなくてははいけない。

結局私の場合は、授業してくれたとかいうと嬉しくなっちゃうから、どうだったどうだったと聴きますよね。そうすると来年こうしなきゃいけないが分かる、見えてくることがあったので、そこは今後、ワークショップの成果がどう普及したかをワークショップした人間自身が追跡できるようなコミュニケーションを持つことが大事かな。本当はカフェコンがそうだったのかもしれないのですが、やっぱりちょっと短いのですよね、時間が。

上羽 ワークショップの危険性みたいなのところでいくと、やっている方も参加している方も、現場にいると満足するし、楽しいし、お祭りみたいな感じですよ。文化祭的なものだったりお祭りのな、一緒につきあって出来た、シャンシャンシャンで。それは一つの体験としてすごく大事なことなのかもしれませんが、やっぱりまさにおっしゃったように、それがどうなっているのか。で、学校現場でどうなっているのか、とか。あと民博へのフィードバックですよ。民博へ、じゃあそれがどうフィードバックされているのかという追跡みたいなものっていうものが後半の方では割と求められていたのかな、と。

中牧 民博にも受け入れる姿勢、体制みたいなもの、たとえば窓口として学習支援室とか何かあると、そこで授業に展開したいけれど、どういうサポートをしていたいただけますか、とか相談に乗ってもらえる。

藤原 アンケートを分析して最後に、次のアンケートを提案してみましたけれども、やっぱりそれは継続性というかフィードバックをとっていかないと、分からないですよ。今までそういう項目がなかったですよ。その場の、その日だけの感想とかアンケート。

上羽 感想とかアンケートだけで。あと私自身もワークショップを組み立てたりするので出来たら良かったと思うのは、それぞれ一日で6つとか5つとかすごく面白いワークショップで。私からすると、他のワークショップを組み立てた方がどういう手順で組み立てているのか、もしくはどういうワークシートを使っているのか。で、教員とかとどういう話を、コミュニケーションの取り方をしているのかとい

うのは、ワークショップを運営している側としてもやっぱり興味があって、そこにはきっと今後私がワークショップをしていく、他の人がワークショップをしていく時の宝箱みたいないろいろなものがあるけれども。でも各自がやったものをお互いに手の内を見せあいつこして、こういうところで実はつまずきましたとか、こういうところでは成功したとか、そういう話し合いが出来る場所っていうのも今後の課題になると思うのですけれども。それも具体的にやろうと思ったら5人分も大変なので、たとえば7つワークショップの中でも1つだけはみんなの前でやって、それについてどう思うのかって言うことを博文学で話し合えるような時間っていうのがあればよりすごく魅力的になるかなって思ったのが一つ。

あと良いなと思ったのは、3年間連続という形でワークショップをしているものが結構あって、中山先生も連続性でやっていて、それでやっぱりブラッシュアップしていったり、参加者も2回目の人がいたりとかで。連続性のあるものをできたということは一つ大きなことなのかなとは思いますがね。それがダラダラと続けるのではなくて3回までとかいうルールを途中で決めましたよね。そこら辺っていうのは連続性のある、毎年やっているものという中で生み出されたものとしては、やっぱり面白い。3回やって初めて分かることとかもあると思うので、ワークショップ自体に対してのお互いワークショップをやっているもの同士の議論っていうのがもっと深まるとより良いのかな、と。それは今後の課題だと思いますね。

森茂 今後の課題ということですが、はじめの方で上羽先生もおっしゃっていましたが、各ワークショップの中に「ふりかえり（リフレクション）」の機会が設定されるといいと思いました。このことは、前に『学校と博物館でつくる国際理解教育』を編集した時にも「討論」の中で言ったことですが、その後十分に実現できませんでした。ふりかえりは、ワークショップ参加者が互いの学びを共有するだけでなく、企画者側の目的や意義、研究者側の学問的成果が参加者に伝わったかどうかを確認するよい機会になります。それからもう一つ、ワークショップの経験を自身の授業実践にどうつなげていくかという点が挙げられると思います。先ほど述べたように、授業にはその単元、その時間の「ねらい」があり、それによって教材が選択され、評価が行われます。民博で学んだ学問的知識や学びの手法をどのように授業につなげ、学習を構想していくかが大切だと思います。

藤原 いわゆる事後検証会みたいなものですね、本当はカフェコンがそういう位置づけ的なものではあったのだけれども、ちょっと参加者全体の感想とか拾ったり、目的が拡散してました、言われたとおりで。ワークショップそのものの事後検証みたいなものも、時間が許せばね、当然あって然るべきだとは思いますがけれども。

(終了)